

A・M・ホカート『王権』“Kingship”Oxford University Press,1927 橋本和也訳

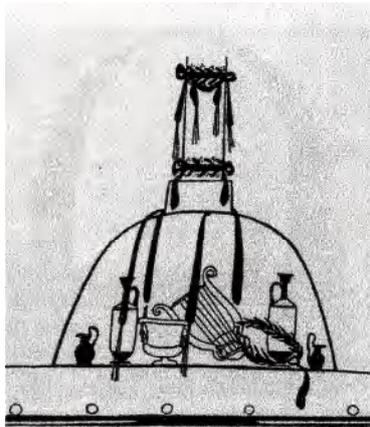
その 3

第14章 塚

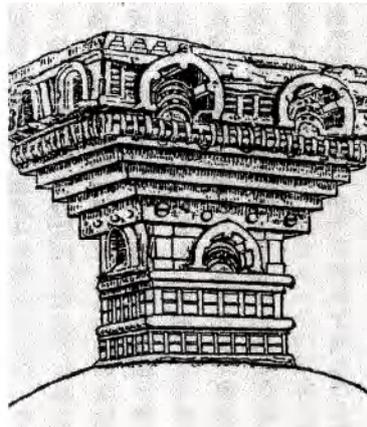
この章は、死体を埋葬する（葬式用の）塚の構造およびその持つ意味について考察する。フィジー人は、長方形の住居を建てて、神殿は通常正方形であった。これらの神殿の最も顕著な特徴は、傾斜の急な屋根が壁の高さの数倍あることであった。この神殿の中に、神は神託を告げにやって来た。この家は土でできた平らな高い土台の上に建てられている。この土台を塚といい、これらの塚は通常は正方形か長方形、時には円形のものもあるようだ。この土台は、部族の生活で非常に重要な役割を演じ、「公の塚」として知られている。部族は大抵移動しているが、彼らの故郷について語る時には、「我々の神殿の塚は何処そこにある」という。首長や地位の高い人々は、通常この神殿の塚に埋められる。

北インドでは埋葬に二流派があり、バラモンの学派は、何段階かある一連の供犠をある程度まで終了した人物は、正方形の塚を建てて埋められた。異教徒の塚は円形であった。その異教徒の中には仏教の最初の発生地である、北インド東部の住民がおり、その地域の人々は、転輪聖王かまたは皇帝を、半円状の塚に埋めていたからであり、皇帝だけでなく、王家の血を引く王子たちも又このような塚の中に埋められた。これらの塚は、ストゥーパまたはトゥーパと呼ばれたが、我々は現代言われているトペという語を使うこととする。それらはまた、火葬用の薪を示す語の派生語であるチャイティヤとも呼ばれる。何故なら死体は中央の部屋に納められる前に、火で焼かれたからである。司祭に関する章で既に述べたが、仏陀（ゴータマ）は皇帝と同じように火葬にされ、塚の中にその遺灰が置かれた。仏陀の遺灰が分納されている仏塔は仏教徒にとっての巡礼の中心になり、最初の最も重要な聖地となった。セイロンでは、転輪聖王または皇帝は、仏塔が付加的なものとなった後でも、その中に引き続き埋められた。シンハリ人は仏塔を、常に仏陀を祭る聖地と考えている。仏教との結合によって、仏塔となった塚にはますます特権と光彩が与えられ、新しい信仰の熱狂の中で、国王は先任者となり、大きさと材料の質とで勝る仏塔を建てることによって、自らの功績を示そうとした。仏塔は、ときおり円形の壇上に建てられているが、普通は四角い壇上に建っている。仏塔は路肩と台座とから成り、その上に固い煉瓦の半球が聳え立っている。このドームは、全構造の中で最も重要な部分であり、その中心となる四角い石の柱は、セイロンでは頂上にまっすぐに埋め込まれている。この上に、ティーと呼ばれる四角なかたまりが乗っており、その上には円いドラムが立っている。セイロンのこのドラムは、神々の「柵」とか「城壁」と言われ、壁柱がそこに飾られた神々の彫像を区切っている。このドラムは尖塔の土台であり、次第に細くなり先が尖っている。

このティーについて詳しく調べた結果、それは窓を持ち、欄干を備えたバルコニー付きの家であり、窓の上には持ち出しで張り出した蛇腹が、やはり窓を持った上の階を支えている。その古い欄干には時には屋根が被せられ、時には壁も付けられており、「閉じられた社^{やしろ}」であったと結論する。インドでは、煉瓦や石といった材料が建物を増大させ、傘が加わって長い先端が尖った円錐になっていき、フィジーでは屋根が何らかの理由で中央の柱を登って、頂上にまで達していった。インドの仏塔は、火葬にされた遺灰を納めており、フィジーの塚は土葬にされた死体を納めていた。古代ギリシア人は、デルフォイ（ギリシア中部フォキス地方のパルナッソス山麓にある町で、アポロンの神託の地）が世界の中心だと信じ、その都市をオムファロスと呼んだ。オムファロスとは、もともと何か膨らんだものを意味していた。デルフォイのオムファロスは、ピュートン（パルナッソス山にいたガイアを守っていた大蛇で、アポロンによって退治された）の塚または墓であり、宝物殿の形をしていた。この言語は、通常は花輪をつけ網をかけた卵半分の形か、または円錐形の石を指すときに使われる。しばしばアポロはその石の上に坐っている姿で描かれている。ここでインド・フィジーの仏塔（葬式に起源がある）との比較をし、ギリシアの塚とオムファロスの石は、構造的には仏塔のように一つの全体を作っていると考える。



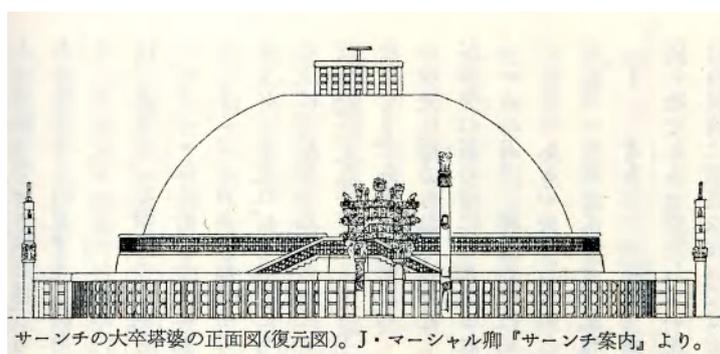
ギリシアの墓



バージャーのトペの柱頭

インド考古学の先駆者であるファーガソンが、インドの仏塔と英国の円形の塚が同一物であると推定していたことにより、考古学者は概して彼の例にならう傾向にあると言いつつ、彼らもこの構造的な類似の説明は細部において十分ではなく、また起源を異にする可能性が残っていることも認めていると言いつつ、中央に安置室を持つ半円球の小山という構図につき考察し、円形の塚が単なる小山ではなく、思考の何らかの体系を反映しているとの考えに至り、考古学者は比較法を認めない傾向にあると批判しながら、比較法を用いて追及する。即ち円形の塚の上に、中央の柱か四角な社が、またはその両方が立てられている事例を全世界から集めて比較し、もし両者が独立的に共存していたなら、社というものが、共通の祖型を持つ特徴であったことがはっきりするだろう、とその解明に及ぶ。考古学者の言う、死体を排除しようという自然な衝動は、死体の上に土をかけたり、埋葬用の穴を

掘るという行為を証明はするであろうが、しかしこの単純な衝動は、何故人々が、もはや悪臭を発しなくなった遺骸の上にわざわざ小山を積み上げたり、その小山の外郭を完全な円に、多くの場合、半円状に仕上げる労を払うのかを説明しはしない、この形状を説明するには、更なる思考を重ねる必要があると言い、インドのサタパタ・プラフマナの文献から考察を始める。



サーンチのストゥーパ 世界最古の仏教遺跡(仏陀の舎利埋葬～仏教寺院の元とされている)

「生存中に火の祭壇の建築に関係するあらゆる儀式を行った人間の墓は、その祭壇に似せて作られる」。その場合、墓の塚の各部分は祭壇の部分に対応しており、両者は同じ意味を持っている。「彼は埋葬のための塚を石で囲う。塚の囲い石は、祭壇の回りの囲い石に対応する」。サタパタの第七書の祭壇の描写から、「囲い石で家の祭壇を囲む理由は、家はこの世界であり、囲い石は海であるからで、彼は海を世界の周囲に拓げる。彼が拓げるのは大洋である。それ故、大洋は四方に流れる。それ故、大洋は時計方向に巡る」。

このように祭壇と塚は、大洋にまわりを囲まれた世界を表象している、と解説する。

次に、第八書を引用し、祭壇の全部分の完全な分析をこの塚に適用すると、第一層は地球であり、第二層が大気で、第三層が空であることが分かる。この上に、神々が住む天界がある。この神々は塚の頂上に置かれた煉瓦によって表され、「天の住民」と呼ばれる。サタパタは四角い塚を描いているが、それは異教徒が好んで作る円形の塚の変種であると考えていた。「埋葬の塚は四角である。プラジャパティの子孫である神々と悪魔は、世界の四方位を争っていた。神々はその四地区からライヴァルで、敵である悪魔を追い払った。悪魔はその地区を奪われ、打ち負かされた。それ故、神々の従者たちは四角い塚を作り、

悪魔の従者である東方の人々は塚を円く作る」との一文を引用する。東方の流派は宇宙を見たままの形態に合せて円い塚を作るのだが、その方法が独自なものであるとは思えない。しかし、西洋人の間では、四地区が儀礼的な重要性を持っているので、この流派は彼らの「見た世界」に似せては塚を作らず、「思い描かれた世界」と一致させるつもりだったと解釈する。ある著名な考古学者は、これはインドの儀礼研究者たちの単なる説明に過ぎないと抗議しているが、それは我々が原子を基礎に置いて自然を説明するように、インド人は自然とのアナロジーで習慣や信仰を説明し、その説明方法は、インド文明よりもはるかに古く確立した習慣であった。が、**本当のところ、円い塚の円形は何故なのだろうか？**と、サタパタの理論を更に以下四つの観点から点検追求する。

まず**第一**に、首尾一貫性についての点検。ヴェーダの王は、聖職授任式の後に、三歩歩いて三界の征服を行った。この三歩は、太陽が地平線から登り、大気中を経て天に届き、彼方の神々の世界へとたどり着く姿を再現している。**王が死んだとき、彼は三界を表象する墓の中に安置**され、その上に神々の家が聳えなければならぬというのは、少しも必然的なことではないが、いずれにせよ、それは首尾一貫している。

第二には、ブラーフマナとは関係を持たぬ習慣からの点検。インドでは人々は仏塔の周りを巡る。これは非常に古い習慣であり、世界中にかなり広がっているが、この習慣はブラーフマナに示唆されたものではない。この巡回の意味ははっきりしている。**礼拝者たちは太陽と星の運行を真似ているのである。**バラモン教の儀礼は、供犠を捧げる者が巡回するとき、「私は太陽の回転に従って回る」という。カンボジア人は、王の回りで、左から右へ、手から手へと七本の蠟燭を回すが、それは世界の中心にあるメル山を回る七つの惑星の運行を表象していることを知っている。そして、もし礼拝者たちが太陽と星を表しているなら、**その塚は星がそのまわりを巡る世界を表すことになる。**シンハリ人は、ティーの両側に太陽を表象する盤を置く習慣を持っていた。天の眼である太陽を東に、月を西に置いている。これは、インド人の見解と一致する。またシンハリ人は、メル山を表象する四角い石を、しばしば仏塔の中に安置している。仏塔の中心に世界の中心を表象する石を一つ置くのは、**仏塔が世界を表象していると考えているからに違いない。**この習慣は、ギリシア人がデルフォイのオムファロス石を世界の中心であると信じるようになった過程を説明する。ではどのようにしてそう信じるに至ったのか？それは人間は一度信じてしまったことは、何事によらず信じ続けるものだからである、と理解を示す。難しいのは、**どのように始まったのか？**と問い、「もし、ピュートンの塚が宇宙を表象していたのならば、その中心にあるオムファロスの石は世界の中心であったことになる」と述べる。

第三に、比較による方法。サタパタに起源を持っていないが、サタパタと考えを同じくする事例。それは少なくとも一点で、フィジー人、シンハリ人、ギリシア人は一致している。彼らは皆、**神々の住居を塚の頂上に置いているのである、**と述べる。

最後に、最も重要な点検は、其々の理論が全ての事実を説明しているか否かである、言い

サタパタの理論は、形、メル石の存在、ティーの上に置かれる太陽の円盤、神々の住居の場所等々を説明している。が、それと同じかそれ以上に全ての事柄を説明する理論が他にあるか？調査を通して見て、サタパタに匹敵すると思われるただ一つの理論は、「功利主義」と呼ばれるものだけである。**功利主義の理論とは、人々が死体を守りたいという願望から塚を築くのだと考えるものである。**しかしそれでは、この目的から塚の持つ様々な特徴がどのようにして生じてきたのかは、解明されない。すべての結果がただ一つの原因から導き出されるべきであるとは、必ずしも考える必要はないように思える。このような比較の必要性が認められないうちは、考古学はまだ科学と見なされる資格を持ってない、とこの章を結ぶ。

P・S—サタパタの塚に関する理論は、バラモンによる愚かな発明だと見なす考古学者は、ポルフィリ（アレクサンドリア学派の哲学者）を参照していたが、借用はこの事例に当てはまらない。それ故、**宇宙を表象する社の起源は、インド人とイラン人とが一つの国を形成していた時代にまで遡らねばならない。**注釈「ゾロアスターは、・・・」は省略する。

第15章 神話と築山

この章では、前章で検討した葬式用の塚についての概念を拡大すると述べ、これは死んだ首長や王の単なる記念碑ではなく、部族全体の繁栄がその塚の中に込められており、彼らは故郷を離れざるを得なくなった時、新たな塚を建てるため、必要なだけの土と、その塚に属している聖なる木も持っていった。この「塚と聖なる木」の関係を、まずフィジー、インド、ギリシアの事例からその共通性を証明した上で、だがそれだけでは地域的に十分な幅を持っているとは言えず、西アジアから東に広がる地域だけに発達したものに過ぎぬのかも知れないと、その検証を更に西方まで進め、最初の起源を明確にしようとし、古代ドイツ人、ローマ人の語る「円形の大地」について記述し、共に共通性が見出せるとするが、起源については明確には述べられていない。

フィジーの事例としてカムバラ島をあげる。「土とヴェシの木」の神話は、オロイの岡の地名説話だが、このヴェシの木は大地に植物を植えるときに、掘り棒として使おうと考えていたものであった。彼らの説明を理解するためには、まず彼らの習慣と信仰を理解しなくてはならないと言い、「堂々たる台座」、つまり社が立っている小丘は、氏族や部族の生活の中心であったが、絶え間ない戦いの結果、敗者になったとき、祖先を祭る神聖なる塚から身を裂かれる思いで去らねばならなかった。その時彼らは、新しい住居に神聖なる土を幾らか運び新しい塚を作った。部族が移動する際、神聖なる土の他に、部族の木を運んでいったという事例は幾つかあると、オヴァラウの部族の話、オロイの住居を去らねばならなかったカムバラの人々の伝説、ロトゥマ島の島作り伝説等をあげる。ロトゥマ島の島作りの伝説は、砂を使ったことになっている故に、その砂の聖性を示しており、この島の人々は純粋な黒土からなるこの島の土に埋められることを嫌がり、砂に死者が埋葬されている。

これによって、砂の籠は祖先神の神聖なる墓を示すことは明らかであるとする。

更にロトゥマ島のマルハハという場所は、ラホの上陸地点と、その中で彼と臣下がカヴァを作った大きな窪んだ岩と、彼らが積み上げた円形の塚がある。これらのことから再構築すると、移住民は聖なる砂を二個の籠に一杯つめて運び、新しい土地に築き上げた神聖なる塚を、その砂で聖別し、そしてカヴァ儀礼を行い、ラホを王として即位させた。

北インドの例としてバサルの発掘についての記述に「二つの土の塚が、大きな溜め池の東の土手の上に立っている。その塚はビームセンがそこに落とした二つの籠であり、その柱は彼が籠を運ぶのに使った棒だと信じられている」とある。問題の柱は、紀元前三世紀にアショカ王によって建てられた新しいものであるが、彼らはそう信じている。これによってカムバラの掘り棒とバサラの運搬用の棒とはまったく同一であり、二つの棒が神聖なる木であることも同じであると言い、インド文学に出てくるチャイティアの木が、文字通り火葬用の薪として使われていたことをその証拠とする。セイロンでは、聖なるインド菩提樹が仏塔のそばに必ず植えられているが、この木が起源的に葬式と関係を持っていたと言う事実は、仏塔の葬式起源と同様忘れ去られているのである、という。この木は多様な寺院の図案の中に描かれて通常崇拝されており、傘がさしかけられている故に、これが塚の頂上に建てられた社についての理論と矛盾するものとは考えられない。又ハリソン女史の『テミス』の中には、ギリシアの塚の上に植えられた一本の木が描かれているが、それもわれわれの理論を立証するものとなる。ヨーロッパでも幾つかの事例はあるが、塚との関係を持つ物語を私は知らないが、作った者がその場にある土を使わないで遠くからわざわざ運んで来たのなら、それなりの理由があったのだろうが、その理由は伝説を比較研究することによってのみ知ることが出来、インドやフィジーと同じ伝説の形態になるものを探す役割は、民俗学者に譲らねばならないと述べ、最後に「円形の大地」を描写し章を結ぶ。

第16章 天地創造

前章のロトゥマ島の伝説は、第7章であげた戴冠式（即位式）の儀礼項目は、聖なる塚の建築をも含むより大きな体系の一部であることを示している。王の即位式と塚の製作は、仮に「土地の始まりの儀式」と呼ぶ一つの儀式の体系に含まれることとなる。

フィジーのヴィティ・レヴ本島の丘陵地帯に住む部族の習慣は、ロトゥマ島の伝説と一致する。但し海岸地方の首長たちのために繰り返し行われる即位式と違い、彼らは新しい首長1人1人のために即位式をする訳ではない。そこでは、人々が初めて塚を築き、部族の歴史が始まった時の、最高の首長とその部下の小首長たちの即位式しか知らない。しかし用いる言葉は同じであり、「形を作ること」「型に入れて作り上げること」を意味し、我々が「世界の創造」と呼ぶ事態を指すこともあり、また「即位式」にも使われる。ヴァヌア・レヴ島の西部の住民は、収穫が悪いときにはいつでも、即位式の儀礼を行う。この儀式を彼らは「土地をかたち作る」または「大地を創る」と呼んでいる。儀礼によって「世界を

創る」とか、「島を作る」という考えは、我々の宇宙観とは全く両立しない。が、インド人は大胆にも公言している。サタパタは長々と、世界がいかに創造されたかを描いている。独自の呪文が唱えられる非常に洗練された儀礼とともに、一塊の土が掘られる。この土で火皿が作られた。この過程で大地が出来、大気が、空が出来。この火皿は全宇宙を表象している。この様に宇宙を創造することによって、人は宇宙をコントロールする。供犠者は火皿を作った後に残った土を使って、宇宙を様々な存在で満たし続け、神々をも作る。王の戴冠式の究極の目的は、世界をコントロールし、「豊穡さと生物を創造する」ことである。エジプトのファラオは、自分の中に「自然を枯渇させることなく、毎日自分を新たに作る造物主のエネルギー、すなわち創造の神秘」を持っていた。バビロニア人は春に太陽が回帰するのを祝って、大きな創造の儀礼を一年の初めに執行した。サタパタ・ブラフマナによると、世界が、最初は供犠によって創られ、その犠牲になったのは、神々と悪魔の父、生物の主であるプラジャーパティ（人間）で、創成の犠牲として供されたものは、現実のものにせよ象徴的なものにせよ、人間であった。リグ＝ヴェーダはそれをもっと明確に示している。その中では、神々がどのようにプルシャ（人間）を切り裂いて供犠をし、かつ頭と四肢から全宇宙を形作ったかを描いている。それを要約すると・・・

- 完璧に捧げられた供犠（プルシャを聖餐に）から、固まったバターが集められた。是を彼（神）は空の動物と、森と村の動物にかえた。
- それを馬と、上下の顎に歯を持つ動物にかえた。またそれから牛を作り、山羊と羊を作った。神々がプルシャ（人間）を切り分けたとき、どの位多くの部分に分けたのだろうか？
- 彼（プルシャ）の口は司祭になった。彼の二本の腕は貴族に、彼の両脇は従者に、両足は平民になった。
- 彼の心臓からは月が、眼からは太陽が生まれた。彼の口からはインドラと火の神が、息からは風の神が生まれた。
- 彼のへそからは空気が生じ、頭からは天が造られ、二本の足からは大地が、耳からは宿舎が作られた。こうして彼ら（神々）は世界を創造した。
- この供犠でもって、神々は犠牲に対して供犠を捧げたのであった。

リグ＝ヴェーダが創造を一つの供犠と考えていたことは明らかであるが、同時にプルシャが犠牲にされる以前に少なくとも大地は存在していたから、我々の造るという語の意味では、この供犠が世界を造らなかったこともはっきりしている。古代のインド人やドイツ人と現代のギルバート島民との神話は顕著な一致をみる、とそれぞれの物語を紹介する。これらの創成の物語とは、無から何かを作り出すのではなく、単に既に存在する世界を取り扱い、その世界に作用する方法を表しているものと信じる方が、ずっと適切ではないかと述べ、これは明らかに「われわれ」の創造の概念とは異なり、「作物が不作のときにはいつでもこの儀礼が行われるので、これは活力を回復する儀礼として考えるべきである」と結論する。古代インド人は人間を小宇宙と見なし、人間の其々の部分は大宇宙の何処かの

部分と対応していると考えた。頭は天に、眼は太陽に、息は風に、足は大地に、というように。しかし、古代インド人が、眼と太陽はある程度似ているからと言って、両者を全く同一視し、一方に働きかければ他方に影響するなどとは信じていなかっただろう。両者は同一物ではなく、何か第三者の介入によって同一物と見なされたのであろう。

その仕組みは・・・眼=X

太陽=X

∴ 眼=太陽 といった馴染みの等式に見られる。

この未知数の X は、供犠であり、また供犠の様々な部分であり、とりわけ祭壇である。

祭壇（さらに言えば埋葬の塚）は、前に見たように作られていたので、各部分が宇宙のある部分と、または宇宙のその部分と関係を持つ神と同一視され、他方祭壇は人間のある部分とも同一視された。この様に祭壇は二つの対応する体系を持っていた。一つは「神々との関係」、他方は「人間自身との関係」である。祭壇と同じく、犠牲になるものも宇宙を表象しており、その各部分は宇宙の部分を表す。供犠する者は犠牲になるものとなり、インド人の供犠における基本的な原理である。それ故、供犠者は宇宙とそのあらゆる部分と一体になる。この概念的な同一性を通して、人は世界に影響を与えることができ、世界がうまく働かないときにはそれを修繕することが出来るのであるが、それを供犠という方法によって、その形を一度解体しまた作りあげるのである。

完全な創造儀礼は、複数の儀式よりなる一つの広範な体系で、その中には、宇宙を示す塚や祭壇一塚を立てること、聖なる木を植えること、敵の力を追い払うこと、王と女王と臣下の即位式、大地のエッセンスを所有し、大地が共同体のために産出するあらゆるものを神秘的に所有することなどが含まれる。人間の創造と、王や臣下の即位式が同一視され得る根拠を述べると、バビロニアの初期には、人間という言葉は貴族を指していた。またヘブライの神話は貴族層のものであった。エジプトの封建時代（紀元前 17 世紀～16 世紀、エジプト第 15 王朝時代）には、高官とは「神」すなわち王に対する「人間」を指していた。古代インドでもまた、人間という言葉は常に特別な意味で使われており、一般的な人間ではなく、リグ＝ヴェーダの中で供犠されたような、先史時代の余りはっきりとはしない人物や、最初の皇帝でありかつ最高の賢者であった偉人を指していた等である。

第 17 章 ヨシュア

フィジー人にも古代インド人にも、太陽の運行を遅くしたり速くしたりできるという信仰を持っている。ローデシア（ジンバブエ）の黒人も同じ能力を持っていると考えている。同じことがローデシアから北へ二千マイル行った所（正確にはスーダンかエチオピアあたりだが、エジプトのことか？）でも信じられている。このようにフィジーから西へ行くラインと、南アフリカから北へ行くラインの二本が、「**聖なる王権の発祥地**」と思えると言う。（太陽の運行制御信仰だけで「聖なる王権の発祥地」と言うのは性急すぎないか？）。

エジプト、メソポタミア、小アジア、エーゲ海と南ヨーロッパの地域に集まっているのであり、この地域内では、人間は太陽を遅らせる力を持っていると考えられている、と言う。ヨシュア（紀元前13世紀ころの人、旧約聖書に登場するユダヤ人の指導者）が、ギベオンの戦いで、イスラエルの人々の前で主に向かって言った言葉により、神の意思で太陽が天の中空にとどまり、およそ1日、没しなかった、とヤシャルの書（ヨシュア記の中の書）に記されている。ポリネシア人は、英雄のマウイがかって太陽に罾をしかけて捕らえ、もっとゆっくり進むようにと太陽を打った、と信じていた。太陽の魂を葦の結び目にしっかり縛りつけることが出来るとフィジー人のように考えている所では、英雄が太陽を打ったとしても別に驚嘆すべきことではない、とこの章を結ぶ。

第18章 神々

一般には、神話とは、忠実な記憶から作られたものではなく、非常に生き生きとした想像の産物であり、事実から靈感を受けていても、変形されているので、それからは殆ど元の事実を認識出来ないと考えられている、としながら、神話はたとえ空想的な性格を持ったものではあっても、結局はちゃんとした歴史であるという結論に屢なつた、と述べる。それは、事実の断片が時折変形を受けずに残っていたり、粗野な神話の中に散見しているから可能なのであると言ひ、その事実とは、自然現象、太陽、月、雲や風、大洋や川等、全てのこの物質的世界と、心、言葉、正義などの様な抽象的な存在等であり、事実を変形する方法は擬人化と呼ばれ、生命のない物体に人間の人格や、両手、顔、言葉と、人間の行動や付属物を与えるのである、と述べる。インドでは少なくとも、**神々とは**、人格化された自然現象か又は道徳であることは確かである。が、その擬人化の方法は全く説明されていない。神話学者はいつも、未開人は擬人法の常用者であると答えるのみであり、それに到る過程を少しも明らかにしていない。人類学者は今や、ヨーロッパ人とは違った方法で自然現象を眺める民族を、殆どもらすことなく、全世界的に探し歩いてきた。その結果、未開人が我々と違っているとしても、それは彼らが自然現象に興味を持っておらず、詩的靈感の苦悩の中でさえ擬人化を全く行っていないという予想外の実態が分かった、と言う。彼らに問っても、擬人化の意味さえ理解されない。結果としてこのような無意識的な擬人化は、地上の何処で見出せるだろうか。非ヨーロッパ的精神を理解しないで、擬人化と言う語を使う資格はない。結論を言えば、事実を平明に述べていることになる神話の中に、天と地との結婚神話がある。これは大空と大地との結合であるが、それは代理によって行われる。この代理は王と王女であり、婿と嫁である。彼ら二人の抱擁は、天と地との抱擁であるという考えは、この問題全般に対する解決の糸口にならないか？と問う。一度一人の人間が太陽と一体化され得ると認められると、その人物の行為は太陽の行為となり、同時にその人物は太陽に関係する種々の言葉で描かれる。または逆に、太陽が人間に関する言葉で描かれることにならないか？ここには二重の過程がある。「人間の太陽化」

と、「太陽の人間化」の二つである。これは人間＝太陽という等式の結果なのである。太陽は、人間化されるだけでなく、動物化もされる。太陽は、馬、転輪、金色の円盤、祭壇の煉瓦等どんな場合であれ、太陽に捧げられた供犠と同一の性格を持つことになる。これらは、ヴェーダを正確に解釈すればその中に全て述べられていると言い、リグ＝ヴェーダの中のインドラとナムチの神話を取り上げ、インドラの勝利をあげる。サタパタでは、このインドラの最初の勝利が儀礼によって得られたと考えており、この儀礼が以後繰り返し行われているとする。それは「・・・泡は、専門家によって知られる悪なる力を、供犠執行者が打ち破るための雷になる。こうしてソマを浄めた後、彼はそれを飲む。この精神的に天に登る呪術によって、彼は神になるのである。ソマを飲まぬ悪魔は、あらゆる方向に追い散らされ、供犠者は最高の王となる」という内容である。このあと「ヴィシュヌが三歩歩くという神話」をラーマヤナから、サタパタから儀礼の起源としての「呪術的な戦争」を、キリスト教における賛美歌とヴェーダの歌を比較し、ヤースカによって書かれた『ニルクタ』の事例を、英国のジョージ5世時の「宮廷新聞」の例、タヒチ、エジプト、バビロニア、ローマ、ケルトとドイツの神話、特にギリシア神話の広範な地域への影響を考察した上で、共通的に神々の人間への化身、自然物の擬人化等が存在することを考察し、特にインド、エジプト、バビロニアにおける「個々の神々を自然現象から作りだした条件」は共に、「神聖なる王を持つ」という共通性に着目する。エジプトでは少なくとも王と太陽を同一化する論理は厳格に見られるといい、更に宗教の発展段階における「太陽崇拜」と「死者儀礼」の時間的前後関係を考察する。自然神の起源を死者の霊に求めることは難しいが、自然神から祖先崇拜を引き出すのは容易であるという。太陽神とは、すなわち太陽の本質であるが、供犠によって1人の人間に所属し、それはその人間のもう一つの自己、彼の魂となる。その人間が死ぬと、魂は次に行われる供犠によって彼の後継者に移行される。こうして王朝の創立者の魂である太陽は、次々に後継者に渡されていく。この魂が太陽の影であって、祖先に固有なものではないことを忘れたときに、死者の霊とその生まれ変わりを崇拜するようになる。現在のフィジー人は「霊」という名の下に無差別に神々、死者の霊、小妖精を崇拜しているが、これは第1章で指摘したように、「初めの精霊」＝「初めからの祖先霊」であって、死んだ人間の魂ではなく、天体にその起源を持つ。太陽―崇拜から祖先―崇拜へ、太陽―神話から英雄―伝説への移行は容易に起こりうる。それ故、世界中の様々な地域で相互に無関係に、これらの例を見出すことができる。「聖なる王権」に関する古い宗教が、その基本的な教義を理解出来ない人々の所まで広がって行くときには、必ずと言ってよいほど「祖先―崇拜」の形態となって表われる。古代の創成儀礼と即位式とは、聖なる人物に、永遠なる天と、大地と、大気の本質や、形態や、影を注入し、彼に不死の魂を与えた。聖職授任式は全階級に広がっているが、それに依って人々は魂を作るのであるが、その魂は通常、起源的に共有財産であったと想定されているが、トンガの平民、フィジー人の子供は魂を持っていないという。魂がどのようにして獲得されるかを説明するには、フィールド・ワーカーが注意をこの問題に向けるとき、**イニシエーション儀礼**か**聖職授任式**を通してのみ、人々が魂を始めて獲得し得たことが明らかになるであろう、とこの章を結ぶ。

第19章 エピローグ

これらの研究は、ただ単に理由を知りたいという好奇心から、最初は手当たり次第に着手されたものであったが、結果として一様に我々を**神聖なる王の制度**へと導いていった。一見バラバラに見えたものが、検討していくうちに、相互に依存し合っている様々な部分からなる有機体となっている事が分かった。我々が**聖なる王権**と呼ぶ制度を持つ社会構造内では、様々な部分が持続し、拡大し、収縮し、新しいものと代わって、古い機能と共に古い形態をも失っていくが、この様な全ての変化を通して、一つの同じ構造を認めることが出来る。一例として、ここで扱った地域全般にわたって君主制度はみな**戴冠式儀礼を含んでいた**が、この儀礼の重要性と発展の度合いは、国ごとに違い多様である。この儀礼の本来の機能は人間を神に変えることであったが、王子が自動的に王座を継承し、父の死という単なる事実によってのみ王となる時は、この戴冠式は実践的な目的を失ってしまい、反儀礼主義者や他の対立する動機と衝突するや否や消えてしまった。戴冠式自身も幾つかの要素を持っており、聖体拝領、塗油式、授任式、誓いといった部分的な儀式に分解され得る。これらもまた一つの構造を持っていることが分かる。山上の垂訓を注意深く他の部分との関係で検討することによってのみ、それを戴冠式の誓いと同一ものだと言うことが出来る。この様に問題となる儀礼を精密に調べ始めると、ほとんど無意識的に、言語学者がずっと行ってきた比較歴史学的方法を我々も取るようになった。彼らは言葉を音と意味の体系として扱い、明確な構造の類似がある場合には、共通の起源を持つ証拠と考へ、多くの事例から変化の法則を導き出し、その法則をそれほどはっきりしない事例に適応した。彼らはこの様に既知のものから、未知のものへと分析を進めていくことに熟達し、哲学的論議を駆使してその様な推論を行ってきたのではなく、インド＝ヨーロッパ言語の詳細な分析を通して、彼らが集めた事実が彼らをその様に導いたのである。

歴史言語学と同じく、ヨーロッパから太平洋までの君主制度を分析する時には、この全地域に見られる大いなる多様性は、同一の起源に、すなわち**聖なる王権**へと遡っていることに気付くであろう。この聖なる王という言葉は非常に堂々とした響きを持つ。神は崇高であり、王には威厳がある。が、この様な後の時代の感覚を、初期的な状態にあるこの制度の創始者にも当て嵌めるのは間違いであろうし、神や王の起源に荘厳さを求めるのも間違いであろう。神々は、最初は極めて非人格的であり、印象的存在というよりむしろ有用な存在であったであろうし、また本来の司祭一王は、偉大な尊厳を持つ人格ではなく、彼の短調だが同時にグロテスクでもある平凡な機能とは、「食物の定期的な供給と十分な出生率を、最上の方法で確かにすることである」と推測し得た。

もしある王が、自力で王位を次第に華麗で偉大なものにしたとしたら、それは間違いなく、王権に伴う機能や国土を拡大したいという欲望や機会があれば、自分を誇示したいという、人間にとって普遍的な欲望等が動機となっていよう。事実司祭一王はそのような機会に事欠かなかった。彼は、臣下に対して大いに優位な地位にいた。自然の永遠なる秩序の支持者たる彼は、自制し、常に尊厳の念を抱かせるように振舞わなければならない、また同様な自制を他の者に課するためには、権威を備えていなければならない。神々を人格化した彼の運命は、神々が自然の事物の非人格的な影から、理想的な人格という最高の頂点へと上昇するに従って、上昇して行った。王たちとそ

の従者たちを通じて、神々はまずその人格を獲得したのであった。しかしその人格に、神々の持つ広大な属性と機能とを結合させた結果、神々に人間の形態を最初に貸与した人間以上の存在になり、更には、神々は地上の代理人の上に光を投げかける理想的な姿を獲得することになった。

太陽は、初期においてか、後の推測においてか、神々や王たちが受けるこの種の賞賛の中で筆頭の地位に立った。栄光が太陽の特性であり、人々は地に伏し、自然で自発的な衝動によってそれを礼拝したと一般的には考えられているが、しかし熱帯地方に住む人間にとって、太陽は恩恵であるよりむしろやっかいのものであり、必要悪であると考えられている。ただ北方の人々によってのみ、太陽の出現が喜びを持って迎えらる。陽光が悪天候と寒さを打ち負かさず過程が精神化されて、善の悪に対する勝利となったのである。太陽光線は昇華されて奇跡的な力に、それ故に全能なる力になった。衰弱と死に抵抗する精力を与える一服の飲み物は、変形されて精神的な不滅性を与える聖なる飲み物となった。天と地との正式な関係を確かにする儀礼は、洗練されて秘蹟となり、男女の交合に威厳と永遠性を与え、文明の進歩に少なからぬ貢献をしたのであったと述べる。

この昇華の過程を詳細に最後まで辿ることは、ここでの仕事の範囲を超えていると言ひ、まず何が起こったのか？次に何故それが起こったのか？を推測しようと続ける。精神化の過程には二つの有力な動因があっただろうと、「不信仰は信仰にとっての一つの必要条件である。」と「退廃は一つの昇華力である。」との二つの動因をあげる。前者の考察から、「キリスト教の成功は、精神を厳密な正確さで抑圧しないという事実の負っており、仏教の創始者は、純粹哲学の厳格で融通のきかぬ教義によって拘束されるのを、賢明にも拒否した。」と、また後者では、胃の渴望から魂の治癒を引き出す論考を述べ、それに対して憤慨する人がいようと、先の世代の正統派と言われた人々は、ダーウィンとウォーレスが獣から人間を派生させようと努めたときに、反対の声をあげた。彼らは人間が猿と関連があるという考えを、神を冒瀆するものだと決め付けたが、彼らの子供たちは、その考えに馴染んだだけでなく、その理論から神に関するより高尚な考えを引き出したと反論し、「その神とは、無限の時の流れを通して、卑賤な存在から最も高遠なる存在までを創造した存在である。神はそのような存在ではあるが、発生系統図において獣からかなり遅れて抜け出した人類が、自然界の事物の征服から始めて、内部の精神を征服した速さに、次の世代の青年たちは、先の世代の人々が感じたような怒りではなく、むしろ驚異を感じるであろう。」とこの書を終える。

【考察】

◎天地創造について

第16章で使っている**天地創造**と言う言葉は、**創造神話**のうち、特に**ユダヤ教・キリスト教**の聖典である旧約聖書・創世記等に記されている、神による世界の創出のことである。

「**創造神話**」とは、人類・地球・生命および宇宙の起源を説明する物語であるが、一般的に「**創造神話**」と言った場合、『至高の存在』(例えば神)が、慎重に考えて『宇宙を創造した』と言う様な、宗教的神話である「**創成神話**」と同一視されるが、「**創造神話**」は非宗教的主張や現代科学、哲学に基づく理論を含むように一般化される。各地で其々固有の**創造神話**として語られているが、

その考え方のばらつきは大きい。幾つかの地域の「創造神話」を記述してみたい。

■ 創世記では2つの「天地創造」が併記されているが、その内の一つの天地創造の流れは・・・

- 1日目 原始の海の表面に混沌とした暗闇がある中、神は光を作り、昼と夜が出来た。
- 2日目 神は空(天)を作った。
- 3日目 神は大地を作り、海が生まれ、植物が出来た。
- 4日目 神は太陽と月と星を作った。
- 5日目 神は魚と鳥を作った。
- 6日目 神は獣と家畜と、神に似せた人を作った。
- 7日目 神は休んだ。・・・と記されている。これはヘブライ人、カンボジアの戴冠式と同じと言う。

■ インドでは、既に記したリグ=ヴェーダによると…………

- プルシャは千の頭と、千の眼と、千の足を持っていた。彼は地球のあらゆる部分を覆って、地球より十指の幅だけ超えていた。
- プルシャは実際この世界である。今までも、そしてこれからも……
- ……生まれた時、彼は地球を超え、裏に行き、また前にまで来た。
- 神々がプルシャを聖餐にして供犠を執行した時に、春はその溶けたバターであり、冬はその燃料であり、秋はその聖餐であった。
- 完璧に捧げられた供犠（プルシャを聖餐に）から、固まったバターが集められた。是を彼（神）は空の動物と、森と村の動物にかえた。
- それを馬と、上下の顎に歯を持つ動物にかえた。またそれから牛を作り、山羊と羊を作った。
- 神々がプルシャ（人間）を切り分けたとき、どの位多くの部分に分けたのだろうか？
- 彼（プルシャ）の口は司祭になった。彼の二本の腕は貴族に、彼の両脇は従者に、両足は平民になった。
- 彼の心臓からは月が、眼からは太陽が生まれた。彼の口からはインドラと火の神が、息からは風の神が生まれた。
- 彼のへそからは空気が生じ、頭からは天が造られ、二本の足からは大地が、耳からは宿舎が作られた。こうして彼ら（神々）は世界を創造した。
- この供犠でもって、神々は犠牲に対して供犠を捧げたのであった。

■ わが国では“古事記”・“日本書記”で述べられている。両者は大筋においては似通っているが内容はいささか相違している。ここでは“古事記”を取り上げる。

卷一 神代篇は「天地開闢」で始まり、次に「天地開闢」から生まれた伊邪那岐神と伊邪那美神よる「国生み」神話、「国生み」の後に「神生み」神話が語られる。

○「天地開闢」世界の最初に、高天原に相次いで三柱の神が生まれた。

- ・天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）
- ・高御産巢日神（たかみむすひのかみ）
- ・神産巢日神（かみむすひのかみ）

○続いて、二柱の神が生まれた。

- ・宇摩志阿斯訶備比古遲神(うましあしかびひこちのかみ)
- ・天之常立神 (あめのとこたちのかみ)

この五柱の神は、特に性別はなく、身を隠してしまった。それ故、これ以上表立って神話には登場しないが、根源的な影響力を持つ特別な神、そのため別天津神(ことあまつかみ)と呼ぶ。

次に、また二柱の神が生まれた。

- ・国之常立神 (くにのとこたちのかみ)
- ・豊雲野神 (とよくものかみ)

この二柱の神もまた性別はなく、またこれ以降神話には登場しない。これに引き続き、五組十柱の神々が生まれた。五組の神々は、それぞれ男女の対の神々であるが、最後に生まれた伊邪那岐命(いざなぎのみこと)とその妹伊邪那美命(いざなみのみこと)以外は省略する。

以上の七組十二柱の神々を総称して神代七代(かみのよななよ)と言う。

○「**国生み**」日本の国土創成譚を伝える神話で、**伊邪那岐命と伊邪那美命**の二柱の神は、別天つ神たちに漂っていた大地を完成させることを命じられる。別天つ神たちは、天沼矛(あめのぬぼこ)を二神に与えた。伊邪那岐神と伊邪那美神は、天浮橋(あめのうきはし)に立って、天沼矛で、混沌とした大地をかき混ぜる。この時、矛から滴り落ちたものが、積もって島となった。この島を淤能碁呂島(おのごろじま)と言う。二神は淤能碁呂島に降り立って会話し、結婚する。最初二つの子を産むがちゃんとした子供でなかったので、葦舟に乗せて流した後、天つ神の所に赴き相談する。占いによって最初の方法が良くなかったとされ、島に帰り逆の方法を行う。ここからこの二神は、大八島を構成する島々を生み出していった。八つの産んだ島は省略する。

○「**神生み**」イザナギとイザナミは「国生み」の後、様々な神々を生み出していったが、火の神カグツチを出産した際に、イザナミは火傷で死ぬ。イザナギはその怒りからカグツチを十拳剣で切り殺し、イザナミを捜しに黄泉の国へと赴くが、黄泉の国のイザナミは既に変わり果てた姿になっていた。これの慄いたイザナギは逃げた。イザナギは黄泉のケガレを清めるために禊をした。この時も、様々な神々が生まれたが、最後に左の御目を洗った時に、天照大御神(アマテラスオホミカミ・日の神、高天原を支配)、右の御目を洗った時に、月読命(ツクヨミノミコト・月の神、夜を支配)、御鼻を洗った時に、建速須佐之男命(タケハヤスサノヲノミコトミ・海を支配)が生まれた。これらの神は三貴神と呼ばれ、イザナギによって世界の支配を命じられた。

天照大御神は天皇家の最高神で、太陽神である。

■ 中国神話における天地開闢

史記にも記載がなく、その初めての記述は、呉の時代に成立した神話集『三五歴記』にある。天地がその姿かたちをなす前、全ては卵の中身のようにドロドロで混沌としていた。その中に天地開闢の主人公となる盤古が生まれた。盤古が死ぬと、その死体の頭は五岳(東岳泰山、北岳恒山、南岳衡山、西岳華山、中岳嵩山の総称)に、その左目は太陽に、その右目は月に、その血液は海に、その毛髪は草木に、その涙が川に、その呼気が風に、その声が雷になった。

■ インド・「乳海攪拌」

ヒンドゥー教における天地創造神話である。

昔、神々とアスラ(阿修羅)たちが相談して、アムリタ(甘露)を手に入れようと考えた。これは不老不死の妙薬で、大洋をかき混ぜることによって生ずるとされていた。そこで神々は、ヴィシュヌ神の化身である大亀クールマの背中に大マンダラ山を乗せ、その中腹に大蛇ヴァースキを絡ませて、その両端を引き合うことによって山を回転させ、大洋をかき混ぜようと考えた。それだ、大蛇の中央から頭の方にはアスラたちが、尻尾の方には神々が、大蛇の胴を抱えて向かい合った。綱引きの要領で、交互に大蛇を引くと山がぐるぐる回り、その激しい震動によって、魚や海中に住む怪物などがずたずたに寸断された。かくて大洋は乳の海となったが、この乳海攪拌の仕事は、神話によると千年以上続けられたと言う。攪拌の結果は、海中から素晴らしい創造物が続々と飛び出してきた。まず、第一に現れたのが天女アプサラスの1人ランバー、続いてヴィシュヌ神の妻となった美の女神ラクシュミーが生じた。そして最後に甘露アムリタが得られたが、その所有をめぐる神々とアスラたちはさらに相争った。最後にアムリタは神々のものとなったが、神々がアムリタを飲む際にラーフというアスラがこっそり口にした。それを太陽神スーリヤと月神チャンドラがヴィシュヌ神に伝えたので、ニシュヌ神は円盤(チャクラム)でラーフの首を切断した。ラーフは首から上だけが不死となり、頭は告げ口したスーリヤとチャンドラを恨み、追いかけて食べようと飲み込むが体がないため、すぐに外に出てしまう(日食・月食)。その体ケートウと共に吉凶を告げる星となった。

■ エジプトの天地創造

エジプト神話とはエジプト地域で信仰されていた神話のことであるが、地域や時代によって内容の異同が激しく、天地創造に関しても一様でないが、ヘリオポリスにおける信仰に依ると……

○エジプト九柱の神々の物語において、原初の海ヌンより生まれた男神アトゥム(信仰によっては太陽神ラー)は、自慰により生じた精液と吐息を吐き出し、テフヌト(湿気)、シュウ(空気)を其々生じた。シュウとテフヌトの間にゲブ(大地)とヌト(天空)が生まれた。

○ゲブとヌトはずっと抱き合っていたため、シュウがそれを引き離した。この時、ヌトがゲブと接している面は手と足だけになった。また、ゲブはヌトに近づこうと山を作り出した。

○シュウがゲブとヌトを引き離したときに、二神の子として、閏日に死の神オシリス、砂漠の神セト、生命の神イシス、ネフティス及びハロエリスが生まれた。オシリスとイシス、ネフティスとセトは夫婦であった。

以上幾つかの地域における「天地創造」或いは「創造神話」を記したが、残念ながら比較検討する時間を持たない。

○わが国における「王権」について

わが国において「王権」を論ずることが出来るのは、何時頃からのことであろうか？

弥生時代後期から終末期については、一応「王墓」と呼べるものが出現してくるが、それらの被葬

者を「王」としても、「王権」の対象として論ずることが可能か？王と名が付けば、彼はある「一定の領域」を統治する権力を有すると考えられる。その意味では「王権」として論ずる対象にはなり得る。A・M・ホカートの論ずる社会においては、王＝神＝太陽であった。それ故「聖なる王」であった。わが国においては、考古学的には「王」と呼べそうだが、その時代の伝承または文献は少ない。

“古事記”・“日本書紀”に登場する**天照大御神**は、天皇家の最高神であり、太陽神である。しかし、彼女は「王」と言えるのか？彼女が任されたのは“高天原”を治めることであった。そこには天安河(あめのやすのかわ)があり、天之真名井という井戸があり、新嘗を行う御殿(悠紀殿・主基殿のことか?)があり、神に献上するための衣を織る御殿があり、田があり、天金山という鉄を産する山があり、鍛冶をする人がおり、地名として天香具山が出てくる。しかし文献としての内容はこれまでで具体的には論じられない。そこで、先述した「王墓」の被葬者に関し、考古学的に「王権」を語る事が出来るか？福岡県春日市「須玖岡本D地点」、同じく前原市「三雲南小路遺跡」、「平原一号墓」、岡山県倉敷市の「楯築墳丘墓」、島根県出雲市の「西谷三号墓」、同じく安来市「塩津墳丘墓群」、鳥取県湯梨浜町「宮内第1遺跡」、同じく鳥取市「西桂見墳丘墓群」、京都府「三坂神社3号墓」、「大風呂一号墓」、「浅後谷南墳墓」、福井県清水市「小羽山30号墓」、同じく「塚越墳墓」、福井県福井市「南春日山一号墓」、「原目山1号墓」、「原目山2号墓」、「乃木山墳墓」、長野県松本市「弘法山墳墓」、等々「王墓」または「弥生首長墓」と呼ばれるものであるが、「王」としての資格はありそうだが、「王権」を語る資料としてはいささか難しい。

中国の正史の中に文献として出てくるようになると、多少ははっきりしてくる。但し『漢書』地理志や『後漢書』に出てくる、「分かれて百余国となる」や「建武中元二年」、「永初元年」の記事は、国や王が居たことは分かるが、「王権」までは語れない。語れるとすれば、『魏書』東夷倭人条に出てくる邪馬台国の記事からであろう。西暦170年～180年から260～270年位の間であろうか？

その記事から、国名、倭の女王名、官人組織、税の徴収、軍事力、身分制度、祭りごと、交易権、外交権等が有ったことが分かる。これは王権を支える基盤が整っていたことを物語る。

しかしA・M・ホカートの戴冠式の項目と比較することは、やはり資料不足としか言えない。

考古学的にその時代の状況は次第に明らかにはなっているが、邪馬台国そのものの特定は出来ておらず、その実態は未だ不明である。「王権」として明確に語る事が出来るのは、この後数百年後かも知れない。

引用・参考文献

●王権	A・M・ホカート	橋本 和也訳	人文書院	1986
●天地創造ほか	フリー百科事典『Wikipedia』			
●古事記	文芸読本(福永武彦)		河出書房新社	1980
●日本書紀 上	井上 光貞		中央公論社	1987
●アンコールの遺跡	今川 幸雄 ほか		霞ヶ関出版	1969
●古代王権の誕生			角川書店	2003
●北陸の玉と鉄	大阪府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館		2005